

資料紹介

郵政博物館収蔵のイギリス郵便史関係の文献

星名 定雄

はじめに

イギリスは、1840年1月、複雑な距離別の郵便料金を全国一律にして、書状の基本料金を1ペニーに引き下げ、支払いも受取人による「後払い」から差出人による「前払い」の制度に改めた。同年5月、世界に先駆けて切手を発行し、手紙に切手を貼りさえすれば、郵便物として差し出すことができるようにした。この方法は、商工業者そして一般の国民にとって、安い料金で手紙が簡単に送れるようになったので大いに歓迎された。郵便局にとっても、配達の際の手間のかかる料金徴収の仕事から解放されることになる。イギリスのみならず、後年、各国でこの方法が採用されていく。近代郵便の誕生である。

そのイギリス郵便史の研究を私は長年続け、通史と切手に関する本をまとめた⁽¹⁾。執筆に当たって、さまざまな文献に出会ったが、そのうち外国語文献248ロット641冊の書誌データを添えて、郵政博物館に寄贈を申し出たところ、受け入れてもらうことができた。データ全文は郵便史研究会の紀要⁽²⁾に発表している。ここでは、その概要について述べる。

寄贈した文献は、形状的に見れば、単行本、定期行物、小冊子など1000ページに近い本から数ページのパンフレットに近いものまでいろいろな出版物が含まれている。内容面では、学術書もあるが、一般啓蒙書、郵趣文献までこれまた多様である。以下、イギリス郵便史関係の文献を、通史、時代史、海外郵便史、地方郵便史、郵便輸送史、伝記、郵便切手、郵便印、郵便料金、諸史、その他、文献リスト、一般文献に区分して、100冊の文献を紹介する。文献の選択そして紹介はあくまで私の関心に引き寄せて行っているし、評価も私の判断であることをまず最初に申し添えておく。

なお、かつて折にふれて、私はイギリス郵便史の文献を新刊・旧刊を問わず、『郵政研究』や『切手研究』などに発表してきた。もちろん『郵便史研究』にも文献紹介やAmazonで復刻本が購入できることも記事にしてきた⁽³⁾。収蔵図書の一部は復刻本である。それらをまとめて、イギリス郵便史の文献ガイドブックとして出版したこともある⁽⁴⁾。関心のある方は参考にして欲しい。

- 1 拙著『郵便の文化史—イギリスを中心として』（みすず書房、1982年）、同『郵便と切手の社会史〈ペニー・ブラック物語〉』（法政大学出版局、1990年）
- 2 拙稿「イギリス郵便史の文献寄贈について」『郵便史研究』（第41号、2016年3月）
- 3 拙稿「文献リサーチ余録 ネットで見つけた郵便史の古典」『郵便史研究』（第29号、2010年3月）、同「文献リサーチ余録 英国郵便史の文献を読み返す」『郵便史研究』（第30号、2010年9月）
- 4 拙著『イギリス郵便史 文献散策』（郵研社、2012年）

(1) 通史

イギリス郵便史の通史といえば、まず19世紀に刊行された 1. Lewinsと 2. Joyceの本を挙げたい。古典中の古典だ。Lewinsは、古代通信から説き起こし、17世紀ロンドン市内郵便、18世紀郵便料金値上げによる戦費調達などにふれ、後半では19世紀郵便事情を詳述する。社会科学系の文献に引用されるなど、郵便史研究の礎を作った業績は大きい。

Joyceは、17世紀後半から18世紀中葉に至る郵便の発展に関する記述に力を入れている。それはちょうどイギリスが王政復古と名誉革命という大きなうねりを乗り越え、「中世」から「近世」に移りゆく時代に符合する。この頃登場した郵便馬車にも光りをあてている。切れ目のない文章が難解、大著だが参考文献リストがないのが惜しまれる。

3. Hemmeonは、イギリス郵便史にはじめて学問的メスを入れた。著者は郵便と国家財政に強い関心を払い、19世紀前半までに郵便が財源を生み出す機関、収税機関と変遷していく過程を編年的に叙述していく。後半では独占問題や国営電信事業などにも言及する。厳しい書評もあったが、経済史の中に「郵便史」という新しい研究分野を見出したのは著者である。

4. Robinsonは、20世紀前半までのイギリス郵便の発展を、同国の歴史の流れを下敷きにしなが、それまでのどの本よりも豊かに語ってくれる。本格的な学術書であり、基本文献の一冊となっている。郵便局が古くから諜報活動を行っていたことも明かされる。脚注、文献リストも充実。随所に図版・地図を挿入したことにより、一般読者の理解にも役立っている。

5. Staffは、低廉な1ペニー郵便をキーワードに、近世から近代までの郵便の歩みを貴重な図版を交えて平易な文章で綴っていく。本書によれば、1680年、Dockwraがロンドンで戸別配達を開始、市内郵便の嚆矢となる。もちろん料金は1ペニー。1840年、Hillが主導し全国1ペニー郵便が誕生。1898年には海外宛の手紙が1ペニーになる。軽い手紙の料金が高張る新聞よりも高いのは納得できない、と主張する熱心なジャーナリストの運動が実ったものだ。

6. Campbell-Smithの本は、3部14章、900ページにならんとする大著。副題に「公認された王室郵便の歴史」と銘打つ。叙述は16世紀からはじまるが、精彩を放っているのは、第2次大戦後、郵便が国営から民営化されていく過程を300ページ余を割き語っているところだ。サッチャー首相、郵政長官、政治家、労働組合幹部をはじめ、多くの関係者を登場させ、混沌とした議論にメスを入れていく。著者は郵政当局が白羽の矢を立て執筆を依頼した老練な記者。当時、「ファイナンシャル・タイムズ」や「エコノミスト」などで論陣を張っていた。

| 区分 | No. | 著者、書名、頁数、刊行年、発行所（所在地） |
|----|-----|--|
| 通史 | 1 | Lewins, William, <i>Her Majesty's Mails: A History of the Post Office, and an Account of its Present Condition</i> (388 pages), 1864, Sampson Low (London, England). |
| | 2 | Joyce, Herbert, <i>The History of the Post Office from its Establishment down to 1836</i> (468 pages), 1893, Richard Bentley (London, England). |
| | 3 | Hemmeon, Joseph Clarence, <i>The History of the British Post Office</i> (273 pages), 1912, Harvard University Press (Massachusetts, USA). |
| | 4 | Robinson, Howard, <i>The British Post Office, A History</i> (484 pages), 1948 (Reprinted by Greenwood Press, 1970), Princeton University Press (New Jersey, USA). |
| | 5 | Staff, Frank, <i>The Penny Post 1680-1918</i> (219 pages), 1964 (Reprinted in 2001), Lutterworth Press (London, England). |
| | 6 | Campbell-Smith, Duncan, <i>Masters of the Post: The Authorized History of the Royal Mail</i> (879 pages), 2011, Alan Lane (London, England). |

イギリス郵便史関係文献リスト（通史）

(2) 時代史（ローマン・ブリテン、中世近世、郵便改革の時代）

1世紀、ブリテン島はローマの属領となりローマの文明・文化が開花する。ローマン・ブリテンの時代だ。1973年、北辺を護るウィンドランダのローマ軍要塞跡から一枚の木板文書が出土、これまでに2000点が発掘され、ローマン・ブリテンの歴史的解明が進んだ。7. Bowmanの本は成果の一冊。木板文書を解読し、古代ローマ人の社会に光りをあてた。8. Bealeは、ウィンドランダ文書を紹介するとともに、手つかずの分野であったローマ属領時代のブリテン島の駅制についてまとめた。イギリス郵便史研究にとって大きな前進となる。叙述は中世の駅制事情まで及ぶ。9. Daviesは、属領時代の街道と宿駅を丹念に調べて報告する。

中世・近世に入る。国家の密書などを運ぶ者を「王の使者」と呼んだ。仕事には危険がつきまとう。10. Wheeler-Holohanは、秘密のベールに覆われた王の使者の制度を紹介する。表向きの郵便とは異なる国家の裏の通信システムであった。11. Hydeは、難解な中世英語の史料を読み解きながら、16世紀末から100年間続いた郵便特許状付与（grant）と請負（farm）について詳述する。今様にいえば、入札により郵便運営権を民間人に付与すること。12. Ellisは、18世紀郵政省の役割を調査し、郵便以外に、国家財政の源泉、国策プロパガンダそして諜報活動の機関として機能していたことを解明した。巻末に諜報活動経費の記録も収める。

1840年、イギリス郵便が全国均一料金制になり切手が発行された。13. Hillが郵便改革案を世に問うた有名な小冊子。14. Perryは、「大蔵省が省の中の省ならば、郵政省は官僚的組織の中の官僚的組織である」と書きはじめ、官僚主義がはびこったヴィクトリア朝の郵政省内部に目をこらす。行政組織論に近い。15. Goldenは、郵便普及がもたらしたヴィクトリア朝の変化を追う。ポストが登場し、切手を貼った手紙を投函すれば宛先に届く。大いなる進歩だ。封筒や便箋、羽ペンなど郵便関連商品の売上が伸び、文具商は活気づいた。自動封筒製造機もお目見えする。だが新しい通信手段が出てくると、詐欺まがいの広告郵便、脅迫状による郵便犯罪も発生した、と著者は指摘する。昔も今も変わらない。秀逸な社会史である。

| 区分 | No. | 著者、書名、頁数、刊行年、発行所（所在地） |
|-----|-----------|---|
| 時代史 | ローマン・ブリテン | 7 Bowman, Alan K., <i>Life and Letters on the Roman Frontier, Vindolanda and its People</i> (179 pages), 2008 (1st ed. 1994), British Museum Press (London, England). |
| | | 8 Beale, Philip, <i>A History of the Post in England from the Romans to the Stuarts</i> (248 pages), 1998, Ashgate (London, England). |
| | | 9 Davies, Hugh, <i>Roads in Roman Britain</i> (191 pages), 2004 (1st ed. 2002), History Press (Stroud, England). |
| | 中世近世 | 10 Wheeler-Holohan, V., <i>The History of the King's Messengers</i> (406 pages), 1935, Grayson (London, England). |
| | | 11 Hyde, James Wilson, <i>The Early History of the Post in Grant and Farm</i> (371 pages), 1894, Adam & Charles Black (London, England). |
| | | 12 Ellis, Kenneth, <i>The Post Office in the Eighteenth Century: A Study in Administrative History</i> (192 pages), 1969 (1st ed. 1958), Oxford University Press (London, England). |
| | 郵便改革の時代 | 13 Hill, Rowland, <i>Post Office Reform: Its Importance and Practicability</i> , 3rd ed. (97 pages), 1837, Charles Knight (London, England). |
| | | 14 Perry, C. R., <i>The Victorian Post Office: The Growth of a Bureaucracy</i> (316 pages), 1992, Boydell Press (Suffolk, England). |
| | | 15 Golden, Catherine J., <i>Posting It: The Victorian Revolution in Letter Writing</i> (318 pages), 2009, University Press of Florida (Florida, USA). |

イギリス郵便史関係文献リスト（時代史、その1）

(3) 時代史 (近現代)

16. Dauntonは、事業効率、労働問題、国家財政などに言及しつつ、郵便事業を幅広く論じているが、企業分析手法によりイギリス郵便が公社化される直前までの事業収支の解析にも力を入れる。また、郵便改革論者Rowland Hillを、大臣や次官を差し置き全権を掌握しようとして省内で大混乱を引き起こしたと述べ、外部の運動家であればいいが、調整能力が必要な官僚には向かなかった、と断じた。前出Robinsonの郵便史に代わる新たな学術書となる。日本でも遠山嘉博の『現代公企業総論』（東洋経済新報社、1987年）などに引用されている。

17. Davies & Maileの本は絵で見るイギリス郵便史。珍しい図版を多数織り込む。ペニー・ブラック150年記念出版物。18. Hydeは、郵便馬車をはじめ、区分と配達、不可解な住居表示など郵便を巡る仕事の話、エピソード豊かに、そしてユーモアを交え語る。啓蒙書の一冊。19. Jubilee Celebration Committeeが1890年の全国1ペニー郵便50周年を記念し編んだ書。ギルドホールでの公式晩餐会などの行事を記録している。20. Bennettは、20世紀幕開け前後のイギリス郵政を俯瞰して、そこで懸命に働く職員を紹介する。PR本のはしり。著者は「日本は開国後急速に発展し、郵貯管理はカード式を採用、電信は世界各国と結ばれている」と記している。

1930年代、郵政サービス全般にわたり国民の不満が高まっていた。21. Wolmerは本書の中で包括的な改革案を提示。議会・政府の管理を排除し、自主運営を可能とするパブリック・コーポレーション構想を打ち上げた。実現しなかったが、問題を広く提起した功績は大きい。この構想が佐々木弘の『イギリス公企業論の系譜』（千倉書房、1973年）や遠山嘉博の『イギリス産業国有化論』（ミネルヴァ書房、1973年）の中で肯定的に紹介されている。

22. Crutchleyの本は国の行政機関シリーズの一冊。1930年代の郵便・貯金・電電の三事業を紹介、普及しはじめた電話に焦点をあてる。23. Hayは、第二次大戦中に職場を守った郵便局員の活躍を語る。24. Martinは、宇宙通信時代が到来した1960年代の郵政省の業務拡大を概観する。本書によれば、米国通信衛星会社（COMSAT）に出資、2番目のシェアを握った。

| 区分 | No. | 著者、書名、頁数、刊行年、発行所（所在地） |
|------------|---|---|
| 時代史 近現代 | 16 | Daunton, Martin J., <i>Royal Mail: The Post Office since 1840</i> (408 pages), 1985, Athlone Press (London, England). |
| | 17 | Davies, Peter, & Ben Maile, <i>First Post: From Penny Black To The Present Day</i> (140 pages), 1990, Quiller Press (Norfolk, England). |
| | 18 | Hyde, James Wilson, <i>The Royal Mail: Its Curiosities And Romance</i> (306 pages), 1889, Simpkin, Marshall (London, England). |
| | 19 | Jubilee Celebration Committee, <i>Account of the Celebration of the Jubilee of Uniform Inland Penny Postage</i> (341 pages), 1891, Simpkin, Marshall, Hamilton (London, England). |
| | 20 | Bennett, Edward, <i>The Post Office and Its Story: An Interesting Account of the Activities of a Great Government Department</i> (356 pages), 1912, Seely, Service (London, England). |
| | 21 | Wolmer, Viscount, <i>Post Office Reform: Its Importance and Practicability</i> (314 pages), 1932, Nicholson & Watson (London, England). |
| | 22 | Crutchley, E. T., <i>G. P. O.</i> (264 pages), 1938, Cambridge University Press (London, England). |
| | 23 | Hay, Ian, <i>The Post Office Went to War</i> (96 pages), 1946, His Majesty's Stationery Office (London, England). |
| 24 | Martin, Nancy, <i>The Post Office: From Carrier Pigeon to Confravision</i> (141 pages), 1969, J. M. Dent (London, England). | |

イギリス郵便史関係文献リスト (時代史、その2)

(4) 海外郵便史

25. Beale, Almond & Archerの共著は16世紀ロンドンで活躍したイタリア商人コルシーニ一族に宛てた書簡3,604通を分析した学術書。書簡は競売にかけられたが、幸運にも、その前にコピーが作られ、ギルドホール図書館に寄贈されていたことが本書刊行につながった。本書によると、大半の書簡がヨーロッパ各地から届いたもので、その多くが外国商人飛脚によって運ばれていた。差出国の経年変化も分析している。当時の郵便料金や徴収方法も突き止める。郵趣的にも興味深い。著者3人はケンブリッジ出身。詳しくは、コルシーニ書簡にふれた拙稿「イギリス草創期の外国飛脚について」『郵便史研究』（第36号、2013年12月）を参照。

26. Smithは、カナダ郵便の歩みを中心に、イギリス植民地時代の北米全体の郵便事情を明らかにする。ポストンノーヴァスコシャ間などの郵便経由問題では、北米全体を監督していたBenjamin Franklin郵便副長官がカナダには冷たく、ロンドンの郵政本省も理解を示さなかった。本書を読むと、カナダが副長官やロンドンの本省と闘いながら、17世紀以降、カナダの郵便の基礎を築いていったことがわかる。壮大な北米郵便史だ。27. Harrisonは、大西洋を渡ってきた郵便物を示しながら、イギリスなど旧世界とカナダとの郵便事情を語る。

28. Robinsonの本は海外郵便史の基本文献。16世紀以降、帆船の郵便船がドーヴァーからフランスへ、ハリッジからオランダへ、ファルマスからは新大陸へ船出していった。19世紀に蒸気船が就航すると、大西洋横断の時間をアメリカと競う。ブルーリボンの闘いと呼ばれた。イギリス政府は郵便の海上輸送に対し、P&Oやキューナード汽船に巨額の契約金、否、補助金を出し大西洋航路の覇権を目論んだ。後半、著者はアジアへの航路にも言及していく。海運補助金政策について、日本でも横井勝彦の『アジアの海の大英帝国』（同文館出版、1988年）や後藤伸の『イギリス郵船企業P&Oの経営史』（勁草書房、2001年）の中で論じられている。

29. Dibdenの本はわずか24ページだが、400年にわたる英蘭間の郵便の歩みを手際よくまとめている。17世紀、両国間の定期的な郵便交換が渴望され、アムステルダムとロッテルダムの両代表がロンドンに乗り込み交渉を開始したが、それに注文をつけたのがタクシス郵便であった。著者は「タクシスが国際郵便分野で大きな影響力を持っていた」と指摘する。

19世紀、植民地インドへは喜望峰回り、イギリスーアレキサンドリア間は海路、そこからスエズへは陸路、後は海路の陸路併用の最短ルートがあった。オーヴァーランド郵便だ。スエズ運河開通で消えていったが、30. Sidebottomは、その陸路の開拓者に光りをあてた。

| 区分 | No | 著者、書名、頁数、刊行年、発行所（所在地） |
|-------|----|--|
| 海外郵便史 | 25 | Beale, Philip, & Adrian Almond, Mike Scott Archer, <i>The Corsini Letters</i> (224 pages), 2011, Amberley (Stroud, England). |
| | 26 | Smith, William, <i>The History of the Post Office in British North America, 1639-1870</i> (356 pages), 1921, Cambridge University Press (London, England). |
| | 27 | Harrison, Jane E., <i>Until Next Year: Letter Writing and the Mails in the Canadas, 1640-1830</i> (155 pages), 1997, Wilfrid Laurier University Press (Canada). |
| | 28 | Robinson, Howard, <i>Carrying British Mails Overseas</i> (327 pages), 1964, George Allen & Unwin (London, England). |
| | 29 | Dibden, W. G. Stitt, <i>Four Hundred Years of Anglo-Dutch Mail</i> (24 pages), 1965, Postal History Society (The Hague, Netherlands). |
| | 30 | Sidebottom, John K., <i>The Overland Mail: A Postal Historical Study of the Mail Route to India</i> (174 pages), 1948, Postal History Society (London, England). |

イギリス郵便史関係文献リスト（海外郵便史）

(5) 地方郵便史 (イングランド、ウェールズ)

イギリスは、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの4つの国から成る連合王国である。まずイングランドから。31. Brumellの本はロンドンのペニー郵便を郵趣的に解明した労作。本書によると、1680年、民間人のWilliam Dockwraがロンドンで戸別配達サービスをはじめた。料金は1ペニー前払い、だから「ペニー郵便」と称した。400もの書状引受所を設け、戸口まで手紙を配達するサービスは市民に好評で、利益を上げられるまでになった。その途端、国はこの市内郵便を接收し、後年、地方にも展開していく。詳しくは、拙稿「17世紀ロンドンのペニー郵便」『郵便史研究』(第40号、2015年9月)を参照。

32. Midland (GB) Postal History Societyの本はバーミンガム、ウスターシャーなど10地域で展開されたペニー郵便を紹介する。それらを、郵便局長個人が行った非公式地方郵便、法律に則った公式ペニー郵便、村のミニ郵便局が行ったサービスに分類している。地域にはそれぞれの事情があり、さまざまな工夫を凝らして運営されていたことが本書からわかる。

33. Clarkson & Verseyの本はリーズの郵便発展史。17世紀、脇街道の寒村に過ぎなかったが、産業革命期には毛織物工業などが興り、一日半でロンドンとも郵便馬車でつながる。ペニー郵便ができたのは意外と遅く1829年になってからであった。リーズで使用された郵便印の印影も併収されている。目配りの効いた著作、郷土史家にも読まれたことであろう。

34. Donaldの本はケント州の小村セブンオークスの500ページにならんとする大郵便史。40キロ離れたロンドン行き魚の最速輸送便に手紙を託した話、郵便強盗の話など古文書を翻刻した話が並ぶ。村の郵便取扱数と人口の関係なども分析した社会史でもある。

郵便船の母港ファルマスを扱った35. Pawlynの本は、むしろ海外郵便史に分類すべきかもしれないが、イングランド最西南端の港町を軸に話を展開する、ファルマスの地方郵便史でもある。叙述から、同地が母港建設にいかに適した地形であったかが理解できた。挿入された港町や帆船のカラー写真が美しい。

ウェールズは13世紀にイングランドに併合され一体化されたためか、単独の郵便史がほとんどない。36. Archerの本はそのウェールズ郵便史の貴重な一冊。著者は、公文書館などに保存されていた10万点に及ぶ古い書簡を調べ、ウェールズの宿駅の位置を特定し、ホーリーヘッドやミルフォードヘーヴンに向かう駅通ルートを突き止める。同地がアイルランドに向かう重要な中継地点であったことを実証的に証明した。ウェールズ版「近世街道と宿駅」本だ。

| 区分 | No. | 著者、書名、頁数、刊行年、発行所 (所在地) |
|-------|--|---|
| 地方郵便史 | イングランド | 31 Brumell, George, <i>The Local Posts of London, 1680-1840</i> (91 pages), n.d. (1st ed. 1938), R. C. Alcock (Cheltenham, England). |
| | | 32 Midland (GB) Postal History Society, <i>The Local Posts of the Midland Counties to 1840</i> (368 pages), 1993, Midland (GB) Postal History Society (Cranham, England). |
| | | 33 Clarkson, H., & H. C. Versey, <i>The Leeds Postal History to 1858</i> (62 pages), 1970, Yorkshire Postal History Society (Sheffield, England). |
| | | 34 Donald, Archire, <i>The Posts of Sevenoaks in Kent</i> (465 pages), 1992, Woodvale Press (Kent, England). |
| | | 35 Pawlyn, Tony, <i>The Falmouth Packets 1689-1851</i> (144 pages), 2003, Truran (Cornwall, England). |
| ウェールズ | 36 Archer, Michael Scott, <i>The Welsh Post Towns before 1840</i> (148 pages), 1970, Phillimore (Sussex, England). | |

イギリス郵便史関係文献リスト (地方郵便史、その1)

(6) 地方郵便史 (スコットランド、アイルランド)

今も独立運動が燦るスコットランド。イングランドとの関係は複雑微妙だ。37. Haldaneの本は、そのスコットランド郵便に関する学術書。1603年からスコットランド王がイングランドも治める同君連合の時代になり、ロンドンとエディンバラで任命された2人の郵便長官が誕生した。1707年に両王国が合同し連合王国となり、ロンドンがスコットランドの郵便も管理することになった。だが、著者によれば、ロンドンが管理したのは北への入口とエディンバラとを結ぶ主要郵便線路1本だけ。北の王国の郵便運営は北の人々によって維持されてきた。巻末の参考文献、小年表、それに別刷のスコットランドの郵便地図がすばらしい。

38. Grimwood-Taylor著、Sussex編の本には、1593年エディンバラ発ロンドン宛書簡、1694年エディンバラ発ロッテルダム宛書簡などの貴重なエンタニアが満載。1773年から20年間、エディンバラで一民間人がペニー郵便を機能的に運営した話も収める。郵趣家向け。

39. Terrellの本はスコットランドのダンディーのミニ郵便史。ダンディー-エディンバラ-ロンドン間の郵便馬車のスピードアップを実現するまでの過程がまとめられている。

アイルランドはイギリスの植民地であったが、独立戦争を経て、1922年に南はアイルランド自由国に、北はイギリス統治下にとどまることになった。40. Fergusonの本は5世紀にわたるアイルランド郵便の発展を語る大作。1784年に自治が認められ、ダブリンに荘厳な郵政省庁舎ができたが、内戦で破壊された。独立後、赤いポストはナショナル・カラーの緑に、制服の金ボタンの図案は国章のアイリッシュ・ハーブに変更される。主権回復である。厳しい英愛関係下、郵便も翻弄されたことを本書から学ぶことができた。図版も多数収録。

これから紹介する2冊は、アイルランドがイギリスの植民地であった時代の、宗主国と植民地とを結ぶ駅路と郵便船の航路について調べたモノグラフ。41. Saltは、アイルランド海を横断する4航路を紹介する。列挙すれば、一番古く重要なホーリーヘッド-ダブリン航路、北のポートパトリック-ドナハーディー航路、南のミルフォードヘーヴン-ウォーターフォード航路、新しいリヴァプール-ダブリン蒸気船航路となる。郵便料金表も併載。

42. Watsonは、16世紀からアイルランドへの出国港となったホーリーヘッドに絞り、ロンドンからの駅路、ダブリンへの郵便船の運行状況などについて、各分野に目配りしながら叙述している。労作である。ホーリーヘッドは、今も英愛両国を結ぶ連絡港となっている。

| 区分 | No. | 著者、書名、頁数、刊行年、発行所 (所在地) |
|------------------|-----|--|
| 地方郵便史 スコットランド | 37 | Haldane, A. R. B., <i>Three Centuries of Scottish Posts, An Historical Survey to 1836</i> (336 pages), 1971, Edinburgh University Press (Edinburgh, Scotland). |
| | 38 | Grimwood-Taylor, James, edited by John Sussex, <i>The Post in Scotland</i> (96 pages), 1990, Stamp Publicity Board in conjunction with Royal Mail Stamps and the Scottish Post Board. |
| | 39 | Terrell, H., <i>Highwaymen: James Chalmers & The London Mail</i> (31 pages), 1991, Dundee & Tayside Chamber of Commerce and Industry (Dundee, Scotland). |
| アイルランド | 40 | Ferguson, Stephen, <i>The Post Office in Ireland: An Illustrated History</i> (448 pages), 2016, Irish Academic Press (Co. Kildare, Ireland). |
| | 41 | Salt, Denis, <i>The Domestic Packets between Great Britain and Ireland, 1635-1840</i> (56 pages), 1991, Postal History Society (Kent, England). |
| | 42 | Watson, Edward, <i>The Royal Mail to Ireland; or, An Account of the Origin and Development of the Post between London and Ireland through Holyhead, and the Use of the Line of Communication by Travellers</i> (244 pages), 1917, Edward Arnold (London, England). |

イギリス郵便史関係文献リスト (地方郵便史、その2)

(7) 郵便輸送史

43. Croftは、中世イングランドの陸上交通と通信の発達過程を解明する。中世は泥濘の道なき道が普通。著者は「馬がポストボーイより速いというのが、道を熟知した経験のあるポストボーイなら馬よりも早く目的地に着くことができた」と記している。中世の郵便輸送は人の力に負っていた。44. LaMarの小冊子は中世の悪路と旅を検証したもの。

18世紀に入ると、舗装技術の向上や有料道路建設が進み道路事情が改善していく。1784年には郵便馬車も走るようになった。45. Wilkinsonの本は、その郵便馬車の基本文献。馬車導入を提案したJohn Palmerが有名だが、著者は、運営システムを構築したThomas Haskerにも光りをあて、馬車の保守、護衛の雇用、宿場での人手の確保、武器や制服の調達などについて詳述する。巻末に馬車管理局の職員録などの史料も収める。46. Wilsonの本は馬車時代の喧噪を活写する。47. Davisと48. Royal Mailの本は郵便馬車200年の記念出版物。詳しくは、拙稿「イギリスの郵便馬車について」『交通史研究』（第46号、2000年10月）を参照。

19世紀、馬車時代から鉄道時代に。郵便物も鉄道で運ばれる。49. Johnsonの本は鉄道郵便物語。馬車との違いは、鉄道では車内で区分作業ができること。まさに、移動をしながら仕事をする、仕事をしながら移動する。英語では“Travelling Post Office (TPO)”という。旅をする郵便局。言い得て妙である。50. Johnsonの本は廃止されたTPOへの著者のオマージュが込められている。詳しくは、拙稿「イギリスの鉄道郵便について」『郵便史研究』（第31号、2011年9月）を参照。51. Cookは、1963年に起きた郵便列車強奪事件を明らかにする。

52. De Righiは航空郵便について、53. Farrugia & Gammonsは郵便輸送の陸海空500年の歩みについて、多くの図版を入れて紹介する。いずれも当時の国立郵便博物館の出版物。

| 区分 | No. | 著者、書名、頁数、刊行年、発行所（所在地） |
|------|-----|---|
| 陸上 | 43 | Croft, J., <i>Packhorse, Waggon and Post, Land Carriage and Communications under the Tudors and Stuarts</i> (147 pages), 1967, Routledge and Kegan (London, England). |
| | 44 | LaMar, Virginia A., <i>Travel and Roads in England, Folger Booklets on Tudor and Stuart Civilization</i> (45 pages), 1960, Folger Shakespeare Library (Washington DC, USA). |
| 郵便馬車 | 45 | Wilkinson, Frederick, <i>Royal Mail Coaches, An Illustrated History</i> (287 pages), 2007, Tempus (Stroud, England). |
| | 46 | Wilson, Violet A., <i>The Coaching Era</i> (259 pages), 1900, E. P. Dutton (New York, USA). |
| | 47 | Davis, Sally, <i>John Palmer and the Mailcoach Era</i> (24 pages), 1984, Bath Postal Museum (Bath, England). |
| | 48 | Royal Mail, <i>Speed, Regularity and Security in Celebration of the Royal Mail</i> (26 pages), 1984, British Philatelic Bureau (Edinburgh, Scotland). |
| 鉄道郵便 | 49 | Johnson, Peter, <i>Mail by Rail, The History of the TPO & Post Office Railway</i> (128 pages), 1995, Ian Allan (Surrey, England). |
| | 50 | Johnson, Peter, <i>The Travelling Post Office 1838-2004</i> , British Philatelic Bulletin Publication, No.10 (19 pages), 2004, Royal Mail (London, England). |
| | 51 | Cook, Andrew, <i>The Great Train Robbery. The Untold Story from the Closed Investigation Files</i> (266 pages), 2013, History Press (Stroud, England). |
| その他 | 52 | De Righi, Anthony Gordon Rigo, <i>Britain's Pioneer Airmails</i> (24 pages), n.d., National Postal Museum (London, England). |
| | 53 | Farrugia, Jean, & Tony Gammons, <i>Carrying British Mails Five centuries of postal transport by land, sea and air</i> (87 pages), 1980, National Postal Museum (London, England). |

イギリス郵便史関係文献リスト（郵便輸送史）

(8) 伝記 (ヒル、コール、パーマー)

Rowland Hill (1795-1879) は郵便改革者。54. Hillの自叙伝は甥Georgeの協力を仰ぎ完成させた2巻1000ページを越す大著。Rowlandがキダーミンスターで誕生した時の話からはじまるが、本書の大半は「私の改革計画を郵政省内で誰一人理解を示す者はおらず、封建的な官僚組織と闘った」と自己の正当性の立証にあてられている。また、省内でのポストに不満を持ち待遇改善についても多くのページを割き、省内に身内を入れ周りを固めたといわれている。省外では、Hillの改革は賞讃され、没後、ウェストミンスター寺院に埋葬された。省内外で真逆の評価がこれほどある人物も珍しい。16. Dauntonの評価を思い出した。本書の翻訳本が1988年通信協会から刊行されている。訳者は郵政省OBの本多静雄。

後年、一族が三代にわたりRowlandの伝記を機会あるごとに出版している。まず、郵政省に入った息子の55. Pearsonが1887年に父の伝記を、兄の助手となった弟の56. Fredericは1893年に自伝を、末娘の57. Eleanorは1907年に父の伝記を、孫の58. Henryは1940年に祖父の伝記をそれぞれ刊行し、郵便改革の偉大なる成果を述べ、父の、兄の、そして祖父のRowlandを讃えている。59. Farrugiaの小冊子はRowland没後100年の記念出版物。

Sir Henry Cole (1808-82) は、ヴィクトリア時代、港湾、市街地開発など公共事業で腕を振るった。女王の夫君アルバート公の後押しを受け、美術工芸の振興にも尽くす。ColeはHillの郵便改革にも共鳴し、特別な新聞を発行し、政治家や商工業者に大量に配布し改革を成功に導いた。切手図案のアイデアも提案している。60. Coleが彼の自叙伝。

John Palmer (1742-1818) は初めて郵便馬車を走らせた。構想は、二つの都市で劇場を経営し、都市間の役者送迎に馬車を使っていたことから出てきた。構想を郵政長官を飛び越し、後に首相となるピットに提案し実現させた。加えて郵政省の高官ポストを獲得し、馬車運行から上がる利益の配分を迫り政治家や官僚と渡り合った才覚はすごい。61. Clearが彼の伝記。

| 区分 | No. | 著者、書名、頁数、刊行年、発行所 (所在地) |
|----------|-----|--|
| 伝記 ヒル | 54 | Hill, Sir Rowland, & George Birkbeck Hill, <i>The Life of Sir Rowland Hill and the History of Penny Postage</i> (565 (vol. 1) pages, 528 (vol. 2) pages), 1880, Thos. De La Rue (London, England). |
| | 55 | Hill, Pearson, & Rowland Hill, <i>The Post Office of Fifty Years Ago: Containing Reprint of Sir Rowland Hill's Famous Pamphlet, dated 22nd February, 1837, Proposing Penny Postage: with Facsimile of the Original Sketch For the Postage Stamp, and Other Documents</i> (152 pages), 1887, Cassell (London, England). |
| | 56 | Hill, Frederic, & Constance Hill, <i>Frederic Hill: an Autobiography of Fifty Years in Times of Reform</i> (346 pages), 1893, Richard Bentley (London, England). |
| | 57 | Smyth, Eleanor C., <i>Sir Rowland Hill: The Story of A Great Reform told by His Daughter</i> (342 pages), 1907, Fisher Unwin (London, England). |
| | 58 | Hill, Colonel Henry Warburton, <i>Rowland Hill and the Fight for Penny Post</i> (205 pages), 1940, Frederick Warne (London, England). |
| | 59 | Farrugia, Jean, <i>The Life & Work of Sir Rowland Hill 1795-1879</i> (21 pages), 1979, National Postal Museum (London, England). |
| | コール | 60 |
| パーマー | 61 | Clear, C. R., <i>John Palmer (of Bath) Mail Coach Pioneer</i> (109 pages), 1955, Blandford Press (London, England). |

イギリス郵便史関係文献リスト (伝記、その1)

(9) 伝記 (アレン、フォーセット)

Ralph Allen(1693-1764) は赤字の連絡郵便 (Cross Post) を立て直した。17世紀、ロンドンを起点とする街道が6本あった。当時、A街道のB村からC街道のD町へ手紙を出すと、まずB村からA街道でロンドンへ、折り返しC街道に入りD町へ手紙が運ばれたので、ロンドンですべての手紙が監視できた。B村とD町とを結ぶ連絡道路 (脇街道) ができると、ロンドンを經由せず、手紙は連絡道路を使い運ばれた。当局にとっては、距離が短くなり料金収入が減るし、過小申告が横行し収入が更に減った。原因は、ロンドンが連絡郵便を監視できなくなったので、収入を正直に申告する郵便局長がいなくなってしまったからである。

Allenが赤字郵便の運営を請け負うと、さまざまな対策を講じる。報奨金まで出して収入を正直に申告することを徹底させ、駅逦監察官を動員しクロス・チェックを行わせる。例えば、B村からD町へ10通の手紙を差し立てたと申告があったが、料金を徴収するD町からはB村からの手紙はなかったと申告があった時には、監察官がD町へ急行し検査するのである。更に連絡郵便のルートを新設し増収に努める。赤字は黒字に転換し、大きな利益を上げた。

利益を石材事業に投資、加工石材でバースの町を端正な街並みに改造した。Allenの邸宅には政治家、文人、学者ら著名人を招きサロンを主宰する。邸宅は現在公園になっている。温泉病院などの公共施設にも多額の寄附金を出す。Allenの伝記はいくつかあるが、62. Peachの本からは同世代人の評価がわかる。63. Boyceは「社会慈善家、改良家であり、当時の新興ブルジョワジーの理想的な人間であった」と記す。64. Davisの本は地元郵便博物館の小冊子。65. Winsorの本には、Allenの日記や書簡などが収録されている。

Henry Fawcett(1833-84) は25歳の時に猟銃事故で失明。だが妻の献身的な貢献により、学者、政治家として活躍した希有の人物。ケンブリッジ出身。女性参政権にも力を入れた。1880年から4年間、郵政長官に就任する。郵便事業を、大蔵省が徴税機関と見做していたのに対して、彼は、知識の普及、商業発展、家族の絆の強化を目的とすべきとした。功績の一つは小包郵便を創設したこと。伝記が66. Stephenの本。51年間の人生を甦らせてくれる。67. Holtは郵政長官時代の活躍を記す。68. Goldmanは8人の学者のFawcett論を編む。

| 区分 | No. | 著者、書名、頁数、刊行年、発行所 (所在地) |
|--------|---|--|
| 伝記 | アレン | 62 Peach, R. E. M., <i>The Life and Times of Ralph Allen of Prior Park, Bath introduced by a Short Account of Lyncombe and Widcombe, with Notices of His Contemporaries, including Bishop Warburton, Bennet of Widcombe House, Beau Nash, etc. ...</i> (247 pages), 1895, D. Nutt (London, England). |
| | | 63 Boyce, Benjamin, <i>The Benevolent Man: A Life of Ralph Allen of Bath</i> (318 pages), 1967, Harvard University Press (Massachusetts, USA). |
| | | 64 Davis, Sally, <i>Ralph Allen, Benefactor and Postal Reformer</i> (24 pages), 1985, Bath Postal Museum (Bath, England). |
| | | 65 Winsor, Diana, <i>Ralph Allen, Builder of Bath</i> (160 pages), 2010, Polperro Heritage Press (Worcestershire, England). |
| フォーセット | 66 Stephen, Leslie, <i>Life of Henry Fawcett</i> (493 pages), 1885 (Reprinted by Cambridge University Press, 2011), Smith Elder (London, England). | |
| | 67 Holt, Winifred, <i>A Beacon for the Blind Being a Life of Henry Fawcett, the Blind Postmaster-General</i> (343 pages), 1915, Constable (London, England). | |
| | 68 Goldman, Lawrence, edited by, <i>The Blind Victorian Henry Fawcett & British Liberalism</i> (199 pages), 1989, Cambridge University Press (London, England). | |

イギリス郵便史関係文献リスト (伝記、その2)

(10) 郵便切手、郵便印

さすが世界で最初に切手を出した国イギリスである。切手に関する文献も多い。69. Toddの本は切手の歴史。切手がなかった時代の料金徴収方法の記述が面白い。70. Muirは、1840年のペニー・ブラック誕生とその周辺を詳述する。貴重な図版が目を引き。71. Smithは、James Chalmersこそ切手の発明者であると本書の中で力説する。確かに1838年の新聞にアイデアの記事が載ったが、実用化には難があった。72. Loweは、Reginald M. Phillipsから郵便博物館建設の資金5万ポンドとともに寄贈された46巻2500ページのペニー・ブラックなどのコレクションを解説する。73. Evansは、切手と同時に発売されたMulready Envelope（郵便書簡）を解き明かす。74. De Wormsの本はPerkins Bacon社の、75. Eastonの本はDe La Rue社の、切手製造関係の史料を集めた大資料集。前者の本には、1871年、前島密がロンドン滞在中に同社に出した「目打作業を見学したい」という手紙とその返事の写が記録されている。76. Courtenayは、イギリス王室が秘蔵する郵趣コレクションを紹介する。十分に愉しめる本だ。

次に郵便印。ヴィクトリア朝以前の郵便印を扱った77. Batchelor & Picton-Phillipsの本によると、ロンドンのペニー郵便の料金収納印は三角形。三辺に“PENNY POST PAID”と、中央に書状引受所の頭文字が刻されていた。例えば“W”はWestminsterといった具合に。

初の切手ペニー・ブラックには、マルタ十字の形をした消印が使われた。急いで一個一個手で彫ったから、局によって微妙に形が違う。78. Alcock & Hollandは、その違いから使用局を割り出し印影を添えて解説している。この79. Alcock & Hollandの本はイギリスの郵便印の流れを総覧できる。ちょっと古いが、郵便印のエンサイクロペディアである。

| 区分 | No. | 著者、書名、頁数、刊行年、発行所（所在地） |
|------|-----|--|
| 郵便切手 | 69 | Todd, T., <i>A History of British Postage Stamps 1660-1940</i> (274 pages), 1941, Duckworth (London, England). |
| | 70 | Muir, Douglas N., <i>Postal Reform and The Penny Black, A New Appreciation</i> (242 pages), 1990, National Postal Museum (London, England). |
| | 71 | Smith, William J., <i>James Chalmers, Inventor of the Adhesive Postage Stamp</i> (148 pages), 1970, David Winter & Son (Dundee, Scotland). |
| | 72 | Lowe, Robson, <i>The British Postage Stamp: being the history of the nineteenth century postage stamps based on the collection presented to the Nation by Reginald M. Phillips of Brighton</i> (280 pages), 1968 (2nd ed. 1979), National Postal Museum (London, England). |
| | 73 | Evans, Major Edward B., <i>A Description of the Mulready Envelope and of Various Imitations and Caricatures of its Design</i> (240 pages), 1891 (Reprinted by S. R. Publishers & Stanley Gibbons 1970), Stanley Gibbons (London, England). |
| | 74 | De Worms, Percy, extracted, <i>Perkins Bacon Records</i> (526 (vol. 1) pages, 351 (vol. 2) pages), 1953, Royal Philatelic Society (London, England). |
| | 75 | Easton, John, <i>The De La Rue History of British & Foreign Postage Stamps 1855-1901</i> (846 pages), 1958, Faber and Faber for the Royal Philatelic Society (London, England). |
| | 76 | Courtenay, Nicholas, <i>The Queen's Stamps: The Authorised History of the Royal Philatelic Collection</i> (350 pages), 2004, Methuen (London, England). |
| 郵便印 | 77 | Batchelor, L. E., & D. B. Picton-Phillips, <i>Pre-Victorian Stamps & Franks</i> (42 pages), 1971, Picton (Chippenham, England). |
| | 78 | Alcock, R. C., & F. C. Holland, <i>The Maltese Cross Cancellations of the United Kingdom</i> (134 pages), 1970 (1st ed. 1959), Alcock (Cheltenham, England). |
| | 79 | Alcock, R. C., & F. C. Holland, <i>British Postmarks, A Short History and Guide</i> (314 pages), 1960, Alcock (Cheltenham, England). |

イギリス郵便史関係文献リスト（郵便切手、郵便印）

(11) 郵便料金、諸史、その他

80. Lovegroveの本はかつて議員や高官の特権 (privilege) であった無料郵便 (frank) の歴史を綴る。1652年から1840年まで続くが、はじめ封筒に“P”と記した。81. Greenwoodの本は無料だった新聞郵便の研究書。次に有料郵便 (pay letters)。82. Smithの本は郵便料金制度の史的分析研究の学術書。1635年から1911年までの料金の変遷をまとめている。83. Robinsonの本は16世紀まで遡り、エンタイヤを示し冒険商人飛脚の賃料などを郵趣的に解明する。84. Sanford & Saltの本は郵便法・条令・告示などを丹念に調べ、近世までの郵便料金を整理している。

85. Farrugiaの本は郵便ポストの歴史。著者によれば、昔、フィレンツェの教会の壁に取り付けられた通報箱がヒントになったのかもしれないと指摘。また、ロンドン初のポストはパリのもを参考にした、という。86. Robinsonの本は古いポストのミニ写真集。

87. Swiftの本は19世紀から20世紀にかけての郵政事業に従事する労働者の問題を扱う。88. Goldingの本はPost Office Engineering Unionの75年の歩みを記録する。

89. Morganが王室を支える郵便局の郵便印などを調べた本。バッキンガム宮殿以外にも、王室ご一家がウィンザー城やバルモラル城に滞在されると、滞在先で特別の郵便印が使用されるという。90. Cravenの本は郵便配達員がいかに犬を手なずけるかなど、日々の局員の仕事をユーモアたっぷりに語ってくれる。91. *British Philatelic Bulletin* は当局が編集発行する郵趣月刊誌。新切手のニュース以外にも郵便史の記事も掲載されることもあるので見逃さない。1971年第8巻から2008年第45巻までが巻ごとに特別なケースに収められて収蔵されている。

| 区分 | No. | 著者、書名、頁数、刊行年、発行所 (所在地) |
|------|---|--|
| 郵便料金 | 無料郵便 | 80 Lovegrove, J. W. , <i>Herewith My Frank</i> … (140 pages), 1989 (1st ed. 1975). |
| | | 81 Greenwood, Jeremy, <i>Newspapers & the Post Office 1635-1834</i> (n.pag.), 1971, Postal History Society (London, England). |
| | 有料郵便 | 82 Smith, A. D., <i>The Development of Rates of Postage, An Historical and Analytical Study</i> (431 pages), 1971, George Allen & Unwin (London, England). |
| | | 83 Robinson, David, <i>For the Post & Carriage of Letters, A Practical Guide to the Ireland and Foreign Postage Rates of the British Isles 1570-1840</i> (258 pages), 1990, 私家版. |
| | 84 Sanford, O. R., & Denis Salt, <i>British Postal Rates, 1635 to 1839</i> (163 pages), 1990, Postal History Society (Kent, England). | |
| 諸史 | 郵便ポスト | 85 Farrugia, Jean Young, <i>The Letter Box, A History of Post Office Pillar and Wall Boxes</i> (282 pages), 1969, Centaur Press (Sussex, England). |
| | | 86 Robinson, Martin, <i>Old Letter Boxes</i> (32 pages), n.d., Shire Publications (Buckinghamshire, England). |
| | 労働問題 | 87 Swift, H. G., <i>A History of Postal Agitation From Eighty Years Ago Till The Present Day, New and Revised Edition in Two Books, Book 1</i> (302 pages), 1929, Percy Brothers (Manchester & London, England). |
| | | 88 Golding, John, <i>75 Years. A short history of the Post Office Engineering Union</i> (64 pages), c1957, Belmont Press (Northampton, England). |
| その他 | 89 Morgan, Glenn H., <i>Royal Household Mail</i> (220 pages), 1992, British Philatelic Trust (London, England). | |
| | 90 Craven, John C., <i>Post Office People</i> (128 pages), n.d., Percy Brothers (Manchester, England). | |
| | 91 The Post Office, <i>British Philatelic Bulletin</i> , vols. 9-45, 1971-2008, The Post Office (London, England). | |

イギリス郵便史関係文献リスト (郵便料金、諸史、その他)

(12) 文献リスト、一般文献

資料調査はもはやネットで検索する時代だが、次の3冊は旧刊ながら良質の文献ガイドブック。92. Farrugiaの本は旧郵政公文書室の活動、利用方法、資料カタログの案内をする。詳しくは、拙稿「英国のPost Office Archivesの活動について」『切手研究』（第370号、1992年8月）を参照。現在、ロンドンのPostal Museum and Mail Railのホームページで郵政関係の史料が検索できる。93. Haslam & Moretonの本は官報に載った近世の郵便関係の告示などを編纂したもの。94. Strangeの本は郵便史、郵便印、切手に関する文献リストである。

イギリス郵便史を執筆している時に一般の文献もいろいろ読んだ。95. Trevelyanのイギリス史、同じく96. Trevelyanのイギリス社会史、97. Woodwardの改革の時代の本などが記憶に残っている。Trevelyanの本はみすず書房から翻訳書が出ている。

98. Robinsonの本は大英帝国の発展を論述した学術書。36歳の時の著作である。実は、4. のイギリス郵便史は62歳の時の、28. の海外郵便史は78歳の時のRobinsonの著作である。アメリカ人の著者は大英帝国の歴史に造詣が深く、生涯、同国の郵便史も3冊書き上げた。1977年91歳で亡くなる。当時の郵政長官は、2冊目の巻頭に「著者は郵政関係者でもなければ、イギリス人でもないのに……」と記し祝辞を寄せていた。

ロンドンの町の名前が出てくると、そこがどんな町であり、どんな人々が生活していたのだろうか、また、馬車旅館や市場や船着場などの名前も出てくる。立派な建築物の版画などにも出会う。そんな時、99. Thornburyのロンドンの地誌で調べると、いろいろなことがわかる。イギリスの歴史、文学の研究には欠かせないロンドンの百科事典である。6巻3500ページを超える大著だが、1984年に名著普及会から復刻された。100. Weinreb & Hibbertは1巻1000ページのロンドン百科事典である。いずれも図版が多く眺めているだけでも楽しい。

| 区分 | No. | 著者、書名、頁数、刊行年、発行所（所在地） | |
|--------|-------|---|--|
| 文献リスト | 92 | Farrugia, Jean, compiled by, <i>A Guide to Post Office Archives</i> (122 pages), 1986, Post Office Archives (London, England). | |
| | 93 | Haslam, D. G., & C. Moreton, <i>Post Office Notices Extracted from The London Gazette 1666 to 1800</i> (196 pages), 1989, Postal History Society of Lancashire and Cheshire (Oldham, England). | |
| | 94 | Strange, Arnold M., compiled by, <i>A List of Books on the Postal History, Postmarks and Adhesive Postage and Revenue Stamps of Great Britain</i> , 2nd ed. (48 pages), 1971, Great Britain Philatelic Society (London, England). | |
| 一般文献 | イギリス史 | 95 | Trevelyan, G. M., <i>History of England</i> , 1926 (New Impression 1958), Longmans (London, England). |
| | | 96 | Trevelyan, G. M., <i>English Social History; A Survey of Six Centuries Chaucer to Queen Victoria</i> , 1942, Longmans (London, England). |
| | | 97 | Woodward, Sir Llewellyn, <i>The Age of Reform 1815-1870</i> (681 pages), 1962, Oxford University Press (London, England). |
| | 98 | Robinson, Howard, <i>The Development of the British Empire</i> (475 pages), 1922, Houghton Mifflin (New York, USA). | |
| ロンドン地誌 | 99 | Thornbury, Walter, <i>Old and New London, A Narrative of Its History, Its People, and Its Places</i> , vols.1-5, (576 pages each), vol. 6 (636 pages), 1897 (Reprinted by Meicho-Fukyu-Kai 1984), Cassell (London, England). | |
| | 100 | Weinreb, Ben & Christopher Hibbert, <i>The London Encyclopaedia</i> (1029 pages), 1983, Macmillan (London, England). | |

イギリス郵便史関係文献リスト（文献リスト、一般文献）

（ほしな さだお 郵便史研究会副会長）